

● シリーズ 私の見た日本 Vol.188

## 精神的価値に根差す日本の建築

Wang Jingying (ワン・ジンイン)

1994年中国出身。2014年～2019年ドイツ・シュツットガルト大学建築・都市計画学部。2019年～現在、京都大学地球環境学舎人間環境設計論分野小林・落合研究室に在籍。現在の研究テーマ：「滋賀県大津市を対象とした住宅および集落の変遷」



ドイツで過ごした学部生時代、先生方は日本の現代建築をよく取り上げ、興味深い参考事例として紹介した。日本建築の魅力は美的感覚だけにあるわけではない。欧州においてミステリアスな存在であり続けるその特異性もまた、日本建築の魅力である。その背景には社会の複雑性や文化多様性があり、日本建築の魅力を解明することは困難なことかもしれない。現代化したグローバル化の時代においても、日本が文化的アイデンティティを保持できている主な理由として、建築思考が辿ってきた変遷の過程について述べたい。

### 工業的合理主義に基づく西洋モダニズム

バウハウスの運動に由来するモダニズムの核は、一言で言うと、工業化社会における厳格な論理的思考と合理的判断に基づくものである。例えば、西洋の建築家は住宅設計の際に、将来の居住者の「人間としての基本的な要求」の想定から始め、3つの必要不可欠な要素を定義する。まずは身体的な変数、すなわち身体寸法。次に採光や換気、衛生などの生理的な条件。最後は生活における基本動作。歩行、食事、洗身、仕事、娯楽などに十分な空間が必要である。

ここでは、空間とは均質で中性的なものとして捉えられている。ルネサンスや啓蒙の時代の影響を受け、建築設計の中心は「人間」になった。「人間一般の要求」を暗に想定することは、精神的な豊かさをもたらすというより生理的な判断であるが、この人間中心の建築設計は、人間の具現化、建築の民主化とみなされている。この文脈において、空間の設計は必然的に似通った前提に立つことになる。イノベーションは物質やテクノロジー、構造といった側面に求められ、同時に科学的

で合理的な原理に沿っていなければならない。その原理とは、経済合理性、物理的性能、最適な構法、あるいは近年特にドイツで指摘される環境的価値である。建築家らは自身の設計案を主張する際に、個人的な美的感覚についてあまり語りたがらない。設計過程において多少なりとも嗜好の影響を受けているかもしれないのだが、客観的に機能について語るのである。おそらく、それゆえに最近のドイツでのコンペにおいても、シンプルかつ明快な構造の建築形態が多く審査員らに好まれているのだろう。

一見平準で凡庸な建築形態に隠れた優美なディテールをたたえる“Less is more”の考え方は、今もなお、ドイツの現代建築において力をもっているように思われる。

### 日本のヴァナキュラー建築における儀礼的意識

日本の伝統建築の本質的な特徴は革新的な過程のなかで形づくられた。最も重要な特徴は、高低差によって仕切られた居住空間と土間空間ではないだろうか。土間はまるで屋外の延長のように存在していて、天井がなく、見上げるとそこには圧巻の架構を見ることができる。一方で居住空間は閉鎖的で、神聖な場所とされ、暗黙のマナーや敬意が求められる。花を生ける文化があり、畳の縁を踏むことは禁忌とされ、席の並びは仏壇や床の間の位置で決まる。こういった空間とそれにかかわる固有のシステムが、住む人の思考や振る舞いにも結びついている。子どもの頃からそういった環境で過ごすことで、個人の教育としての役割を担うだけでなく、ひいては社会全体にも影響を及ぼすだろう。農作業などは土間で行われ、生活空間は清潔で荘厳な状態が保たれる。2つの空間はそれぞれ必要

で、等しく重要であり、対照的な2つの空間があることで日本の伝統的な暮らしが満たされてきた。

居住空間と土間空間という関係は、西洋化あるいは現代化する近年まで、何世紀にもわたる日本建築の発展のなかで基本的な要素として存在してきた。この関係は、古代の神社においても、粗末な家屋から豪農や裕福な中産階級の住宅まで、あらゆる種類の民家に見られる。したがって、日本の伝統建築における空間は、経済的な要求に依るだけでなく、西洋の「宗教」とは異なる意味での、「宗教的な」要求によって決まるとも言えるだろう。このように受け継がれる儀礼的意識は、秩序や行動様式が長きにわたって維持される人間の伝統だと考えるべきである。宗教にかかわる多くの社会的義務を通して、個人は家の中にいながら社会との連帯を感じることができる。「快適」という言葉は、単に身体的な状態をいうのではなく、精神的な調和を意味するのである。(図2)

### 初期の日本モダニズムに対する批判的考察

産業革命以降、西洋に端を発する近代化運動の世界的な影響が制御できないなかで、日本の現代建築はいかにしてその特異性を保ち続けたのだろうか。日本の建築家、芸術家、社会学者らが、20世紀に日本の都市空間の「西洋化」を批判的に考察したことが、後の世代における従来の建築に対する挑戦的な姿勢の基礎になったのではないかと私は考えている。その先駆的な役割を果たした一人が、「考現学」で知られる今和次郎(1888-1973年)であることに疑いの余地はない。

彼の本来の研究は、歴史的な文脈や慣習に加え、田舎の生活空間や生活様式、農業と

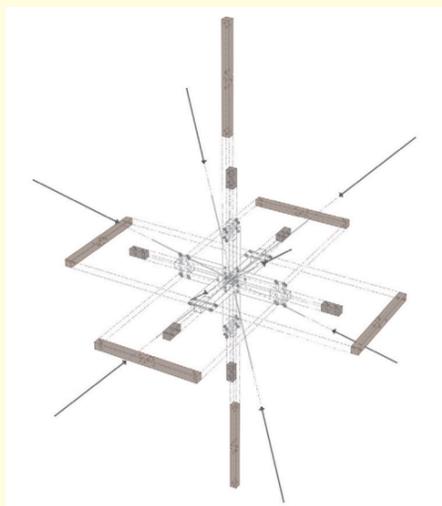


図1：シュツットガルト大学で強調された構造デザイン

自然景観の関係などを子細に観察するものであった。1923年の関東大震災後から都市の現象を研究の対象にし、20世紀初頭の急激な現代化の下で都市生活者の社会行動の変化に着目した。

加えて、観察対象は蟻の列や道端に捨てられた煙草の吸殻、茶碗に入ったひびなど、無意味で使い道のないような些細なものにまで及んだ。彼の調査で最も印象的なのは、実用的な価値をもたず、重要とは思えないディテールの非常に細かな描写である。機能をもたず、なかなか目には見えないものをとらえており、見るものに社会経済的な階層や慣習の影響を想像させ、気づかせてくれる。

「考現学」は、過去を研究する「考古学」の対になるもので、現在を研究する学問として生まれた。こうして、都市環境を対象とした内発的で厳密な観察・記録を通して、外国の考えや方法に基づいた日本の都市研究の限界を超えようとしたのである。



図2：日本の伝統的な農家での楽しい時間

その理論的で方法的な活動を背景に、彼は地方の文化の衰退や国内産業における急速な西洋化に警鐘を鳴らしている。また地方からの移住者が直面する社会的な困難や苦境にも同情を寄せている。彼の研究は、社会と人間との関係に対する関心を表しており、そこでは都市環境が新しい文化的な知覚空間として新鮮に描かれている。

彼のイデオロギーは1960年代から1990年代にかけて、機知に富んだ風変わりな建築家や芸術家らの集団によって推し進められた。遺留品研究所、建築探偵団、トマソン、路上観察学会、アトリエ・ワンなどは、日常的な場所、事物、活動などの社会との暗黙の合意、興味深い瞬間を追求し、異なる視点から建築設計のための人文主義的な規範を提供した。

### 結び

ドイツでは人間の要求を満たすための合理的な設計手法が用いられ、科学的分析や統計的事実に基づく、系統だった都市計画がなされる。それに対して日本では、精神的な価値や人間の知覚に重きをおく姿勢が受け継がれ、ものづくりや建築設計の哲学に根づいており、そのことが西洋化した世界において、日本の建築を際立った存在たらしめているのではないだろうか。ほんの些細な、取るに足らないようなものにさえ敬意を払う、他に類を見ない日本の美的感覚が革新的なプロセスに通底する本質的なイデオロギーの基盤に違いない。

(翻訳：京都大学大学院工学研究科建築学専攻 修士課程学生 和田雄佑)